

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2010年10月26日

派遣者氏名（専門分野）	旗手 瞳	（東洋史・U・M・D 2年）
-------------	------	----------------

下記のとおり報告します。
記

研究テーマ	吐蕃(古代チベット帝国)の東方拡大とその統治
-------	------------------------

派遣期間

2010年 9月1日 ～ 2010年 9月10日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	イギリス	ロンドン	British Library（英国図書館）	

派遣先で実施した研究内容

本派遣者の研究の中心は、7世紀初頭から9世紀半ばまで、現在のチベット高原を中心に展開したチベット最初の統一政権である吐蕃（古代チベット帝国）の歴史である。吐蕃はチベット高原を7世紀前半に統一すると、まもなく西はパミール高原、北はタリム盆地、東は青海へと勢力を拡大し、ユーラシアにおける大国のひとつとなった。特に当時、中国を支配していた唐とは、統一直後からタリム盆地の権益を巡り、一進一退の攻防を繰り返した。そして唐において安史の乱（755～763）が発生したのを契機に、唐の内地深くへ侵攻し、763年にその都である長安を陥落させるに至る。

まもなく吐蕃は長安から隴山山脈のラインにまで撤退するが、隴山以西はこの後、唐の手を離れ、吐蕃の統治下に組み込まれていく。その中に、786年に無血開城し、その後60年余りに渡って吐蕃の支配を受ける河西地方のオアシス都市敦煌も含まれていた。

敦煌は20世紀初頭、莫高窟と総称される石窟寺院の藏経洞から、大量の古文書が発見されたことで名高い。「敦煌文書」と呼ばれる古文書群は、最も古い紀年を持つものが5世紀、遅いものは11世紀初頭（ただし発見後に、さちに新しい時代のものが一部混入した）で、その内には吐蕃の統治下にあった時代に属する文書も含まれていた。

チベット高原の中心部から遠く離れたこの小さなオアシス都市に遺された文書は、他のタリム盆地のミーラーンやマザル・タークといったオアシス都市遺跡から発掘された文書・木簡とともに、吐蕃史研究の最も重要な根本史料となっている。というのも、チベットにおいて遺された同時代の文字史料は、石碑や磨崖碑文が中心で、紙や木簡に書かれた文献は、まったく失われてしまったからである。吐蕃の歴史研究—特に行政機構や軍事組織、徴税基準など国家の根本に関わる具体的な部分の研究は、敦煌で実施されたものから遡及して復元する手法が取られ、現在までに大きな成果を上げている。

そして、その根本史料である敦煌文献は、20世紀初頭に中央アジア探検を敢行したイギリス、フランス、ロシア各国の探検隊によって、自国に持ち帰られた。現在では、これに日本、台湾、そして中国を加えた各国において分散して収蔵されている。1994年に発足したIDP（International Dunhuang Project、国際敦煌プロジェクト）により、各国の敦煌関連（さらに中央アジア探検で得た出土品についても）の収蔵品を、高

画質写真によって Web 上に公開する作業が進行中であるが、いまだ全てを網羅するには至っていない。ゆえに刊行された白黒写真や録文（写真に基づき、文字を転写したもの）で満足できなければ、実物を見に行く必要があった。

今回、その中のひとつであるイギリスの British Library（以下 BL）に収蔵された文書の実物を見るために、本プログラムに参加した。派遣先である BL では 6 日間に渡り、利用するための登録を行った初日も含めて、一日平均 6 時間程の調査を行った。調査の対象に絞った文書は、出発前の時点で漢語が 24 点、チベット語が 5 点である（ただし、漢語の中にチベット語の契約を含むような文書もある）。到着後、それぞれの 1 点が「見るできない状態」にあったので、この時点で計 27 点が対象となった。文献は吐蕃期のものが中心だが、漢文の一部に帰義軍期（848~11 世紀）のものもある。848 年、敦煌の土豪の張議潮が吐蕃の支配を打倒して立てた政権（帰義軍政権）は、行政機構において唐の制度を復活させたが、一方で漢語同様、チベット語が公文書にも使用され続けるなど、吐蕃期との連続性も確固として存在した。特に吐蕃の統治時代の後、敦煌の住民構成は明らかに唐以前のそれと比べて、新しい要素—唐以前には見られない「退渾」や「通類」といった新しい「異民族」集団—が顕著に見られるようになる。ゆえに帰義軍政権下でこれら新出の集団に関係のある文書も、調査の対象とした。

以上が、派遣先である BL で実施した本派遣者の研究内容の概要である。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

当初の目的は、許可の下りた文書のすべてを調査することであった。しかし本派遣者は、外国の図書館での調査、しかも古文書の調査はまったく初めてであり、能率的な調査を行えるだけの力量を備えていなかった。

ゆえに調査 2 日目が終わる頃、方針を変え、最も自分の研究に関連する文献から優先順位をつけて、それらを重点的に調査する方法に切り替えた。吐蕃期に属する四点のチベット語文献はすべて綿密な調査を行い、漢文文献については、いまだ Web 上にアップされておらず、しかも録文も出版されていない文書や、特に手にとって形状を理解することが重要な巻物から調査を進めていった。各文書は、断片・一枚紙、あるいは何件もの案件を張り合わせた巻物（案巻）など多種多様な形状を取るが、結果的に 6 日間の調査で全体の九割ほどまで調査を終えることができた。

調査後、日本にもどってきて、調査メモに基づき、いくつかの文書の読み直しを行った。その結果、現在までで最も信頼できる Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa アジア（アフリカ言語文化研究所）が 2007 年に出版した *Tibetan documents from Dunhuang* (Old tibetan documents online monograph series vol.1) の録文について、何カ所か誤りを含むことが判明した。さらに調査した文書の一部は、すでに研究室の演習で発表している。それらは、修士論文でも立論の最も重要な根本史料として、取り上げる予定である。

派遣後の研究発表の予定

研究室内で行われる演習（修士論文の構想発表）で、すでに調査の成果の一部を発表した（10 月 21 日）。修士論文執筆後には、中央アジアフォーラム等、外部の参加者も臨席する研究会で発表を行いたい、と考えている。